

国語

注 意

- 1 問題は [一] から [三] まであります。
- 2 時間は 50 分です。
- 3 答えはすべて解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 4 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。

「二」次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「聞く」という言葉を『広辞苑』で引くと「言語・声・音などに対し、聴覚キカ^aンが反応を示し活動する」と書かれています。しかし、私の思う「聞く」ということは、この辞書とは少し違います。

「聞く」ことに関して、私の演出の指針になっているエピソードがあります。

一九五五年に人間国宝制度が**ホツソク**すると同時に指定を受けた、**幸祥光**という、人間国宝第一号といえる名人がいました。^{注2}能楽師・小鼓方幸流十六世宗家で、人名辞典などでは「明治以降の能楽師で名人は誰かを専門家が投票したらまちが**なく一番になる**」などと称された、明治・大正・昭和を通しての名人です。この小鼓の名人が当時のSP盤に自分の演奏を録音することになりました。SP盤は竹針ですから、再生時には常時「ギー」という接触音が残ります。^{注4}名人は、その試聴テープを聞くなり即座にNGを出し、結局、その録音されたSP盤は私たちに残されませんでした。^{注6}

「私の鼓の音とは、音と音のあいだにある静寂こそが命なのです」

というのがその理由だったそうです。この一言に空白が支える日本人の精神構造の在りかが、よく現れている気がします。

「よおー ぼん ……よおー ぼん」

と鼓が鳴ったときに、その「ぼん」と次の「ぼん」のあいだにこそ私の音がある——というのは、つまり、無音ということ。そのエピソードに出会ったのは、大学生になってからでした。それから、そのことがずっと心に強く残っていて、

②「ものを聞くことは、音と音の隙間から、何を聞き取るのかということ」

という強い記憶となり、始終、複数の言葉の行き交う稽古場のなかで、よくそのことを思い出すのです。ですから、言葉と言葉の隙間でいったい人間の心のなかの何が動き、次の言葉が生まれてくるのかと、必死にその音を聞き取ろうとしているのです。

のちに、^{注7}武満徹の『音、沈黙と測りあえるほどに』（新潮社、一九七一年）という本に出会い、「沈黙こそ、音なのだ」という一言で、いつそう強くその隙間の音の在り方を確信しました。

——音と音のあいだ、芝居でいえばせりふとせりふのあいだに、実は騒がしく行き交う会話があつて、そのあいだに人間の心の動きが見えてくる。間まというより沈黙③の時こそが豊饒ほうじょうなる関係の時間なのだ。

つまり、「聞く力」とは、単に何かが起こったときの音を聞くことだけではなく、その裏で支える人間の心の動きを聞くことが大事なのです。

人間はふしぎな生物で、耳をすまし、相手の言葉をしっかりと聞こうとすれば、その言葉の途中でも相手が何を言おうとしているのがわかります。作家が書いた劇の流れをどう掴つかんでいくかは、相手役との言葉と空白のあいだから見えてくるものなのです。

また舞台の空白の時間のなかに、観客の想像力が動くときがあります。心動かされる芝居の瞬間は、間まのあいだにいろいろな音や言葉が聞こえてくる、その広がりに出会ったときにあるのです。作家の書いた言葉が情報として入ってきて、観客は物語を構築し、ハイクこしていく。物語としての力が見えてくるところは、実は作家の書いた言葉と言葉のあいだで起こる心の動きなのかもしれません。あるとき、稽古場こでぼろっと零こぼれるように生まれることもあります。だから、はじめからことを決めてかからずに、その場で起こったことに集中することです。必然よりも偶然に生まれることを、稽古場ではより優先する必要があるのです。

人間全体に、聞く力が衰えているように感じます。

他者への伝達手段が、一方通行の意思表示として完全に定着してしまったことにもよりますが、携帯電話のメール機能などもその一つです。文明のリベンセイ④をあえて否定する気はありませんが、自分の言いたいことを相手に伝える行為が、今や一方通行になってしまい、そこに肉声による対話注⑧というダイアログの時間が失われているのです。

聞く力は、人間の普通の生活にとって重要です。この世にはいろいろな人間が生きています。演劇も美術も音楽も人間が表現するものを含めて、生活一般すべて「聞く力」が重要であることに違いはありません。それは俳優を志す人たちにもいえることです。

「相手役のせりふをよく聞くこと、相手の声をよく聞いて、それで動いた自分自身の気持ちに次のせりふになる」と、稽古場で何度繰り返したかわかりません。

それはなぜか。日本の俳優には、そのことが一番欠けていることだからです。

近年、日本の俳優の多くが教科書にしてきたのは、田中千禾夫注9の『物言う術』（未来社、一九五四年）という本でした。もちろん、俳優にとって自分に与えられたヤクカラの言葉ですから、それを使いこなすための「物言う術」が大事なことはいうまでもありません。

しかし、実はこの「物言う術」の前に、相手の言うことをまず聞くこと、「物聞く術」があるのです。簡単に誰にでもできるように思われるでしょうが、これができていない。

④ 私には、「物言う術」の前に、「物聞く術」を大事にしたい。なぜならば、せりふの意思は、相手のせりふを聞くことから生まれないからです。そのせりふは、目の前にいる相手役を、また動かすための言葉で、そのつながりによって物語は動きながら前へと進んでいくのです。そういう人間の関係性が今の俳優の認識に欠けている。とにかく自分のせりふだけを覚えることが大事。そこから自分のせりふの数の多少を問題にしたりする。そんな俳優に、よくめぐり合いますが、そこに何の意味があるでしょう。そうではなく、相手のせりふがあつて、それが声でこちらに投げられるから、自分のせりふが生まれるという、それだけの関係をしっかりと捉えることが、俳優のまず第一の仕事なのです。たった一言のせりふであつても、その前のせりふのすべてを受けて語られている。とても大袈裟おおげさに言えば、その一言の前には人類の歴史が流れているのです。そういう歴史を踏まえて発せられた一つの声が、強く相手を動かすのです。

A 「物言う術」だけを意識して、「自分は、自分のせりふをこう言う」と稽古前から自分の言い方だけを決めてかかる俳優がよくいます。相手役のせりふの語尾だけを覚えていたりして、語尾が変わると「あれ、終わった?」。これではどうしようもない。芝居の流れはその場で断ち切られてしまいます。たとえば、三時間の芝居のなかで、この一行のせりふがなぜに必要なのか。その一行が全体のなかでどのような意味を持っているのか、それを知ることが、俳優が戯曲を読むことなのです。言葉の基本は、自分からはじまるわけではない。相手の言葉を聞くこと、感情を読み取ることから対話がはじまっ

ていくのです。

聞く力を養うには、日常生活から強く意識するほか、方法はないでしょう。

いろいろな人たちの、いろいろな声を聞く。本から言葉を聞く。音楽から、さまざまな音を聞く。山を歩くと小さな草や花が語ってくれる。もちろん、草花が話すわけではないのですが、聞こうとする自分がいるならば小さな声は聞こえてくるはず。

何度でも繰り返します。演劇は聞くことから出発する。そして聞くことは、私たち現代人にとっての、大切な関係のレッスンでもあります。自分の短い一方的なメッセージを送りさえすればそれでいいとする人間のいかに多いことか。そして、過去の記憶の声から、逃れてはいけません。

日常から何が聞こえてくるのか、俳優はそれをつねに聞き取っていく能力を必要とされるのです。

優れた俳優は皆、ちゃんと「聞く」ことができる人だと思います。B 稽古中に、出演者の誰かがうっかり何かの小道具を床に落として、コトンと小さい音を出したとします。すると、自然に音の方角を向く俳優と、音を無視して演技し続ける俳優とがあります。

さあ、どちらが稽古場での正解でしょうか。

それは、自然に音に対して反応する俳優がいい。だって、そこで確かに音が聞こえたのですから。

くりやまたみや
栗山民也『演出家の仕事』

注1 私の演出||筆者は演出家であり、本文は筆者の考えを示した文章である。

注2 能楽師||能を演じることを職業とする人。

注3 小鼓方||能楽師の中で、「小鼓」の演奏を担当する人。

注4 SP盤||プラスチックの円盤に、細い溝を刻むことによって音楽などを録音したものの。

注5 竹針||SP盤に録音された音を再生するときに使う道具。

注6 NG Ⅱよろしくない、ということ。No good の省略形。

注7 武満徹 Ⅱ 作曲家。

注8 ダイアログ Ⅱ 対話に同じ。

注9 田中千禾夫 Ⅱ 劇作家。

問1 } 線 a k e のカタカナを漢字に直せ。

問2 | 線①「名人は、その試聴テープを聞くなり即座にNGを出し、結局、その録音されたSP盤は私たちに残されま

せんでした」とあるが、なぜ残されなかったのか。その理由を四十字以内で説明せよ。(句読点を含む)

問3 | 線②「ものを聞くことは、音と音の隙間から、何を聞き取るのかということ」とあるが、筆者によれば「ものを聞く」とはどういうことか。次のア～オの中から最も適当なものを一つ選んで、記号で答えよ。

- ア せりふとせりふの間で行き交う会話を聞いて、次の言葉になるであろう根源的な音を予測しようとする事。
- イ 人間の心の隙間に潜む言葉の動きを掴み、沈黙の中に存在する相手との関係性を深く理解しようとする事。
- ウ 発せられている音やせりふを聞くことに加えて、音と音の間にある人間の心の動きを理解しようとする事。
- エ 作家の書いた言葉を情報として取り入れることによって物語を構築し、さらに想像力を高めようとする事。
- オ 心動かされる芝居の中で聞こえてくる、音や言葉を聞き取ることで、芝居の流れを理解しようとする事。

問4 ー線③「沈黙」について、本文中における「沈黙」と同じ意味ではない語を、次のア～カの中から二つ選んで、記号で答えよ。

- ア 静寂
- イ 空白
- ウ 構造
- エ 無音
- オ 隙間
- カ 記憶

問5

A

B

に入れるのに最も適当な語を、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選んで、記号で答えよ。

- ア だから
- イ たとえば
- ウ つまり
- エ ところが
- オ さらに

問6

ー線④「私は、『物言う術』の前に、『物聞く術』を大事にしたい」とあるが、「物聞く術」を大事にすることで、俳優は何が出来るようになるのか。五十五字以内で説明せよ。(句読点を含む)

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

筆者は旅に出て、常陸の国（現在の茨城県）の川のほとりを、一人で歩いている。以下は、そのときの出来事である。

X
時雨にぬかるみ多く、（人が歩くところ）人足のあたる所は、帯の広さなる（狭い道があるだけである）片道付きぬ。注1しかるに口とりなきに馬のしたたか稲を負う（たくさん）

て、三四匹とろとろ来かかるに、（どうしていか分からずに）せんすべなく ためらひける。先に立ちたる馬のがぶがぶ泥の中へよけてゆく。後の馬

も引きつづきて、Aかたのごとくなして、また元の道に出て、ゆさゆさと急ぎける。彼は重荷を負ひたれば、身じろぎ自由な（身動き）

らず。我は頭陀袋一つ、いか様にも片脇に寄りてこそ①本意なるべけれ。馬の心に無法者とや思ひたらん。あまり不憫さにBふひん

堤に休らひ見送りければ、しばらくして帰^②りて、主を呼びつつ草食みてたたずむ。やがて刈り穂をそれぞれに結ひ着けて、

人に物いふやうに追ひ立てれば、（その声を区別して）聞き分けて 家の方へ歩み出しぬ。田の人に問へば、③「けふも九つ時までには、七度（正午）

（このようにして）通ひける。」となん語る。おのれ人には 常の産となすべき事も知らず、人の情にて長らふるは、物言はぬ④

(畜類に対しても)
畜類に 恥づかしき境涯なりけり。
(境遇)

(小林一茶『一茶七番日記』)

* 出題にあたり、一部本文を改めたところがある。

注1 口とり馬の口に用具を装着し、その用具に結びつけた綱を引いて、馬を誘導する人。
注2 頭陀袋 旅先でもらった食べ物などを入れて持ち歩く袋。

問1 〰線X「時雨」の読みをひらがなで書け。

問2 〰線Y「いふやうに」について、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直して、ひらがなで答えよ。

問3 〰線②「帰って」、〰線③「問へば」の主語として最も適当なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選んで、記号で答えよ。

ア 馬の飼い主

イ 田で働く人

ウ 筆者

エ 馬

問4 〓線A「かたのごとくなして」、〓線B「あまり不憫さに」の意味として最も適当なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選んで、記号で答えよ。

A 「かたのごとくなして」

ア きちんと肩を並べる形で

イ 前の馬と同じようにして

ウ 飼い主の命令を守って

エ 泥を何度も踏み固めて

B 「あまり不憫さに」

ア あまりにも馬鹿らしく感じて

イ あまりにも出来すぎに感じて

ウ あまりにも気の毒だと感じて

エ あまりにも生意気だと感じて

問5 〓線①「本意なるべけれ」について答えよ。

(1) 筆者は、「誰が」「どうする」ことを「本意なるべけれ」と考えたのか。解答欄に合うように、十字以内で答えよ。

(2) (1)の解答を、筆者が「本意なるべけれ」と考えたのはなぜか。その理由を、三十五字以内で説明せよ。
(句読点も含む)

問6

——線④「物言はぬ畜類に恥づかしき境涯なりけり」のように筆者が述べている理由として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選んで、記号で答えよ。

ア 馬たちは人間である自分に対し思いやりを示してくれているのに、今までの自分は彼らが何も話さないのいいことに見下していたから。

イ 馬たちは自分の仕事に何の疑いもなく働いているのに、自分は心優しい人に日々自分の仕事の不平を聞いてもらいながら生きてきたから。

ウ 馬たちは動物としての立場をわきまえて人間に遠慮し互いに協力しながら働いているのに、自分は行いが悪く定職にも就いていないから。

エ 馬たちは秩序立って黙々と働いているのに、自分はきちんとした職業を持つこともせず他に人たちの好意に助けられて生きているから。

オ 馬たちは黙って働き飼い主に財産を築かせているのに、自分は生涯働かずそれが人間が本来持つて生まれた性質だと言いつつ続けてきたから。

〔三〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

地方都市の進学校である巴波川高校（通称ウズ高）に入学した千映見は、親しい友人も作れず、授業のレベルの高さにも圧倒される毎日で、新しい生活になじめないでいる。千映見は、親友たちとともに過ごした中学時代を恋しく思っていた。

「終点です。どなた様もお忘れ物のないよう……」

下車駅に到着すると、その足でまっすぐ駅ビルに向かう。

四月も後半になると、混雑した電車にも改札口にも、もう慣れた。朝起きるのも遅くなり、時間ぎりぎりで駆け込むことがある。ウズ高生にふさわしい落ち着いた振る舞いをしようなんて考えていたこと I、笑えてくる。慣れとは恐ろしいものだ。

電車通学に注1ロマンスはなく、学校帰りに地元の駅ビルの書店に立ち寄るのが、唯の息抜きだ。

雑誌の立ち読みをして、文庫本の新刊をチェックする。気に入った表紙の小説は、あらすじを読んで中身を想像し、なんとなくわかったような気分になる。好きな作家の新刊も、読むひまがないから諦める。

溜まっている本を、ゴールデンウィークに読破しようと思つた。すっかりご無沙汰しているオーボエも、口が痛くなるほど吹いてみようと思つた。それに、もしかしたら、中学の時のみんなと一日 II は遊べるかな、と期待をしていた。でも、見通しは暗い。

連休明けに、学力試験があることを、今日知らされた。つまりゴールデンウィークには遊ぶな、勉強しろってことだ。

高校に入れば自由があると思つて受験を乗り越えたのに、このまま大学受験まで走らされ続けるのかなあ。走り続けられ

たらしいほうで、早々に、脱落しちゃうのかも。

中学の卒業式のあの日から、わたしは子ども改造ベルトコンベアーに乗せられて、大人の形にされてしまったような気がする。中身はナマ焼けかもしれないのに、大急ぎで外側だけ繕って、憧れのウズ高生には見えるけど、① なんだか自分じやないみたい。

そして、Aはいつも見えるところに迫ってきていて、ぐずぐずしていたら、乗り遅れる……って感じだった。だから、歩くのも、速くなった。

ついさつき、駅の階段で、注3 玉木くんを追い越した。玉木くんは相変わらず、イヤホンで耳をふさぎ、ややうつむいて、世間に対して無関心なようだった。一緒に注4 プリクラを撮ったことすら、忘れてしまったようだった。あれから、わたしが教室で時々玉木くんの眉毛を見つめていることだって、ちっとも気づいていないのだ。

(すぐくもつたいないよ)

わたしはテレパシーを送った。

玉木くんは、気づかない。

あんなに賢そうな人なのに、自分の良いところに気づかないまま、大人になっていくのだろうか。

わたしにも、他人から見たら、いいところが一つくらいはあるのかなあ……。

「千映見ちゃん！」

玉木くんのことを考えながら雑誌を立ち読みしていたので、玉木くんに肩を叩かれたような気がして、飛び上がりそうになった。

振り返ると、注5 マサミイだった。拓新学園の制服をとびきりかわいく着こなしていて、もうすっかり学園に馴染んでいるようだった。校章の横には特という字をもじったバッジがついていた。普通科ではなく、特進科の意味なんだろう。

「千映見ちゃん、今帰り？ 立ち読みなんて、ウズ高生は余裕だねえ」

「あ、ちよつと、息抜きに……」

マサミイとは卒業式以来だ。気まずくてこちらから連絡を取ってないので、マサミイから声を掛けてもらえたのは、正直嬉しい。

マサミイは吹奏楽部では部長をしていて、リーダーの素質があり、ちよつと勝ち気で、でも根はお嬢様っぽいおっとりタイプだった。だけど、その時にくらべると印象が変わってた。

② なんか、目がキラキラしていた。

「うちのガッコ、連休に合宿があんの。遊びに行けるーって喜んでたら、朝八時から夜の十時まで、ずーと特別授業で勉強なんだよ。もー、信じられないでしょ」

マサミイは興奮気味に、猛烈な早口でしゃべり出した。

「へえ、大変だね。フルートは続けてる？」

「特進科だもん、部活なんて禁止だよ。そんなことやつてられないくらい、毎日が、すつごく大変。中学のわたしって毎日いつたいなにしたのって思っちゃう。勝負ははじまつたのに、無駄にした。みんなと一緒に遊んでないで、もつとほやく気が付けば良かった。だからわたし、連休だつて、勉強だよ。ウズ高は、普通に休めるんでしょ」

わたしはマサミイのテンションに合わせて早口で言い返した。

「連休は休みだけど、連休明けに試験があるよ。それに直前に新入生歓迎親睦遠足っていうのがあるよ。観光バスでどこかへ行くんじゃないかって、近くの山まで一日かけて歩いて登って下りるだけで、それじゃ全然歓迎じゃないし、嫌がらせだよーって奴が」

「ええー、勉強合宿よりいいじゃん。夜中まで授業して宿題も出るんだつてよ。もー、あたしら馬鹿だしさー、しょうがないよね。先生もバカバカ言うしさ。こんな問題ウズ高生だったら軽ーく解けるぞ、とか言われちゃつて。ウズ高つて、すごいんでしょ。でも、あたし、負けないから。勉強合宿に参加できるのつて、特進科の生徒だけなんだ。もう志望の大学も決めたし、これからは勝ち組コースを進むから。ウズ高生には、絶対に負けない。じゃあね、中学の時のみんなにもよろしくね。^注チェミと会えて、すつごく懐かしかった」

「マサミイは言いたいことだけ言うと、足早に去って行った。すごい……。」

「懐かしかった」だって。卒業式からやつと一ヶ月が過ぎたというのに。わたしはまだ、ぐじぐじしてるのに、マサミイはきっかり「卒業」していた。

マサミイの後ろ姿を見送りながら、わたしは満員電車に乗らずに見送った日のような、後味の悪さを感じてしまった。マサミイは、あんなに急いで、どこへ行くんだらう。

わたしはその場に踏みとどまり、また立ち読みを続けようとしたけれど、もうなにも頭に入らなかった。

ガタン　ゴトン……。

電車に揺られたような、めまいだった。

(梨屋アリエ『夏の階段』)

注1　ロマンスⅡ恋愛に関する事柄。恋物語。

注2　オーボエⅡ木管楽器の一つ。千映見は中学時代の吹奏楽部でオーボエを担当していた。

注3　玉木くんⅡ千映見のクラスメイト。数人で一緒にプリクラを撮って以来、千映見は玉木くんのが気になる。

注4　プリクラⅡゲームセンターなどにある写真を撮る機械のこと。

注5　マサミイⅡ千映見の中学時代の親友のひとり。千映見と同じ巴波川高校を受験したが、不合格だったため、今は私立の拓新学園に通っている。

注6　チェミⅡ千映見の中学時代のあだ名。

注7　満員電車に乗らずに見送った日Ⅱ千映見は、ぎゅうぎゅう詰め満員電車に足がすくんで乗れないことがあった。

問5 —線②「なんか、目がガラガラしていた」とあるが、この後の会話からうかがえるマサミイの心情を説明したものとして適当でないものを、次のア～オの中から二つ選んで、記号で答えよ。

- ア マサミイは、千映見たちと過ごした中学時代について、今考えると時間を無駄にしまったと感じている。
- イ マサミイは、連休に息抜きできると思っていたのに、特進科だけ勉強合宿の予定が入り、憂うつに感じている。
- ウ マサミイは、ウズ高受験に失敗したことで、大学受験においてはウズ高生に絶対に負けたくないと思っている。
- エ マサミイは、拓新学園で忙しい生活を送っており、千映見と中学時代の感傷に浸りたいという思いは全くない。
- オ マサミイは、連休に遊ぶことを諦めているが、自分たちのことを日々罵倒する先生のことには心底軽蔑している。

問6 —線③「マサミイはきつかり『卒業』していた」とあるが、これはどういうことか。千映見とマサミイの違いに触れ、七十字以内で説明せよ。(句読点を含む)

問7 本文について説明したものとして最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選んで、記号で答えよ。

- ア 玉木くんの描写からは冷淡な印象を受けるが、実は千映見のことが少し気にかかっていることが読みとれる。
- イ マサミイと千映見が早口でしゃべりあう場面では、中学の親友同士ならではの息が合った様子が見られる。
- ウ マサミイと玉木くんの最初の出会いを描くことで、この後二人の関係が発展していくことが暗示されている。
- エ 千映見とマサミイ双方の視点から丁寧な心情描写があり、互いに引くに引けない事情があることがわかる。
- オ 文章は千映見の一人称で語られ、自分に自信を持てずに高校生活を送っている千映見の姿がうかがえる。

問1 (三) 2x5=10

d	a
利便性	器官
e	b
役柄	発足
	c
	把握

問2 (三) 2x5=10

に	再
ある	生
静	時
寂	に
が	常
再	時
現	接
でき	触
な	音
か	が
っ	残
た	り
か	っ
ら	音
の	と
あ	音
い	の
だ	あ
	い
	だ

問3 (三) 2x2=4
ウ

問4 (三) 2x2=4
ウカ

問5 (三) 3x2=6
A
E
B
I

問6 (三) 2x2=4

す	よ	せ
こ	う	り
と	に	ふ
が	な	に
で	り	自
き	ま	分
る	た	の
よ	そ	気
う	の	持
に	せ	ち
な	り	き
る	こ	め
	ふ	る
	で	こ
	相	と
	手	と
	役	が
	を	で
	動	き
	か	る

問1 (三) 2x2=4
しぐれ

問2 (三) 2x2=4
いうように

問3 (三) 2x2=4
②
E
③
ウ

問5 (三) 2x2=4

自	分
が	道
の	片
脇	に
寄	る
こ	と

問6 (三) 2x2=4
E

問1 (三) 2x5=10

に	馬
	は
自	重
分	い
は	荷
袋	物
一	を
つ	背
だ	負
っ	い
た	
か	身
ら	動
	き
	が
	不
	自
	由
	な
	の

問1 (三) 2x5=10

e	a
しん	かい
ぼく	さつ
	b
	ゆい
	っ
	c
	どく
	は
	d
	そ
	し
	っ

問2 (三) 2x2=4
I
オ
II
ウ

問3 (三) 2x5=10

て	の	千
い	に	映
る		見
だ	大	自
け	急	身
だ	ぎ	は
か	で	精
ら	外	神
	見	的
	を	に
	繕	は
	っ	ま
	た	だ
	高	中
	校	学
	生	生
	の	の
	姿	ま
	を	ま
	し	な

問4 (三) 2x2=4
ア

問5 (三) 3x2=6
イオ順不同

問6 (三) 2x5=10

な	生	に	干
い	活	対	映
と	を	し	見
い	送		は
う	マ	マ	ま
こ	て	サ	だ
と	お	ミ	中
	り	イ	学
		は	時
	中	す	代
	学	で	を
	時	に	恋
	代	目	し
	へ	標	く
	の	を	思
	未	持	っ
	練	っ	て
	は	て	い
	一	高	る
	切	校	の

問7 (三) 2x2=4
オ

受験番号

得点

30
高校 - 一般